

中国小説研究

内田道夫著

評論社

中国小説研究

昭和52年1月10日 初版発行

¥ 4,800

著 者 内 田 道 夫

発 行 者 竹 下 晴 信

印刷所 三 倉 印 刷

製本所 株式会社 小林製本

発 行 所 株式 評 論 社

(〒101) 東京都千代田区神田神保町2-16

電話代表 (265) 1961

振替東京 8-7294

(検印省略)

落了。乱丁本は本社にてお取りかいたします。

(A-1)

まえがき

小説は人生の伴侶として人間の歴史に大きな意味をもってきた。中国の場合も例外ではない。ただこれまでいっばんに中国小説の意義を探究する志向に欠けていた感がないわけではない。この論考も、まさしくそのような情況をふまえてはじめられたものである。ひとくちに中国小説といっても、その変遷は多様である。まず研究の中心を六朝・唐時代の小説におき、旧稿は「唐代小説研究」と題した。

唐代小説の研究はかつて塩谷温博士が手を染められてより、内外に数多くの研究が出た。私は唐代小説を考察するにあたり、特に中国小説発展の過程に照らして文学史的位置づけを試みたいと思った。それには中世志怪小説から唐代伝奇小説への推移、および近世白話短篇小説との関連が重要と考え、それぞれの対比を通じて小説の特色を明らかにしようと努めた。本書が前篇（志怪・伝奇）と後篇（近世白話短篇）の二部を構成する結果となったのも、そのような理由からである。このような方法は伝奇の特性の解明のみならず、中国の小説伝統の考察にも少なからず役立ったと考えられる。ただ対象はあまりにも広く、論ずべくして及ぶことのできなかつた問題も少なくない。ちかごろ私の同学や受講者から、本書の出版を促されたのを機会に旧稿に手をいれ、補注を加えた。いささかなりとも先学の欠を補い、大方の参考に供することができれば幸である。

出版にあたっては評論社竹下晴信氏の厚意に負うところが大きい。特に付記して感謝の意をいたす次第である。

昭和五十年十月三十日

凡 例

本論文中の法苑珠林、太平御覧はいずれも四部叢刊本により、太平広記は影談刻本によった。

また本論文中に引用する搜神記は、八巻本と明記する以外はすべて二十巻本をさし、搜神後記、異苑、稽神録などと共に津逮秘書本によった。伝奇の引用は魯迅の唐宋伝奇集を参照し、太平広記などの異文を参考した。

なお参考文献の主要なものには、最も早く世に出た魯迅「中国小説史略」（一九三三年上海北新書局、一九三五年十版訂正本）および「唐宋伝奇集」（全集本また一九五六年文学古籍刊行社校訂本）「稗辺小綴」（唐宋伝奇集付載）「古小説鉤沈」（全集本）があげられる。汪辟疆「唐人小説」（一九三〇年初版、上海神州国光社、一九五五年増訂版、上海古典出版社）もテキストに校訂がほどこされ、その校語も周到である。専ら伝奇を論じたものに、劉開榮「唐代小説研究」（一九四七年初版商務印書館）があり、修訂本（一九五五年三版）が出版された。その他譚正璧「話本与古劇」（一九五六年、上海古典文学社）の「唐代伝奇給与後代文学的影響」は伝奇の影響を細かに指摘している。

日本文学への影響については麻生磯次博士「江戸文学と支那文学」（昭和二十一年、三省堂初版）などが参照される。また中国小説史の概要については「中国小説の世界」（内田道夫編、昭和四五年、評論社）が参照される。以上主要のものを記したが、一々についてはそれぞれ各章の注に参考文献をかかげた。

本論文の研究はいずれも各章に引用する参考文献に負うところが大きい。論文中には多く著者の敬称を省略したが、ここに改めて感謝の意を表する次第である。

目次

前篇

第一章	序説	七
第二章	志怪の成立	九
第三章	搜神記の世界	三六
第四章	伝奇の成立 ——初期の作品古鏡記、補江総白猿伝、游仙窟——	六二
第五章	冥報記について	七
第六章	唐の中期以降の作品(一) ——柳毅伝、水神説話の展開について	一〇二
第七章	唐の中期以降の作品(二) ——三夢記・離魂記・枕中記・南柯太守伝、夢と幻設について	一四二
第八章	唐の中期以降の作品(三)	一五五

——鶯鶯伝・李娃伝・霍小玉伝・馮燕伝・紅線伝・聶隱娘伝・
劉無双伝、剣俠と艶情

第九章	志怪の伝統	二九
-----	-------	----

第十章	伝奇と文体	三〇
-----	-------	----

後 篇

第一章	古今小説の性格	三三
-----	---------	----

——歴史と小説——

第二章	項羽神物語	三四
-----	-------	----

——宗教と小説——

第三章	白娘子物語	三六
-----	-------	----

第四章	伝統と敷演	三七
-----	-------	----

第五章	霊怪の伝統	三九
-----	-------	----

あとがき		三七
------	--	----

要目索引		卷末
------	--	----

中国小说研究

前 篇

第一章 序 説

小説に要求されるものは、内容が新鮮であり、興味深いことである。その意味では小説の起源が人人にもてはやされた街の話題にあると説かれるのは肯かれることである。班固の漢書藝文志には小説の性格を歴史的に規定して小説家者流は思うに稗官に出たもので、街談巷語、道聽塗説者のつくつたものである。孔子のことは（実は論語子張篇に見える子夏のことば）に小道といえども必ず見るべきものがある。けれども遠大なことをはかるには、それになすむ恐れがある。だから君子は小説をおさめない、とある。しかし、それだからと云って小説は滅びもしない。村ざとの小ざかしいものが考えることで、忘れないように綴りとめても置く。かりに一言でも取るべきことがあるならば、それは草刈や木樵のやからの議論とも云うものである。（諸子略）⁽¹⁾

と述べている。「小説には必ず見るべきものがある」というのは、それが人生の姿を伝えているからと解せられよう。桓譚は小説について「叢残の小語を合し、近くは譬喩を取り、身を治め家を理めるに、観るべき辞あり」と述べている。しかしながら小説はひつきょう小道であり、君子のいさぎよしとしないものであるという言葉に、小説に対する知識人の評価がうかがえる。班固が学問の諸派十家のうちに小説を列しながら、観るべきもの九家といっているのは、そうした態度のあらわれである。けれども「小説は滅びもしない」人生の伴侶であり、村ざとの小ざかしいものが考え、綴りとめてもおく、いわば草刈や木樵などの庶民の世界を基盤として育った文芸であった。

漢書藝文志に見える小説家の書籍は、すでに散佚して知りがたいが、いわゆる小説の中には、おそらく神話、史話をはじめとして、時事、寓言のたぐい、あるいは民間伝説が含まれていたであろう。ことに先秦諸子の中には自己の学説の真理を寓する意図をもって仮構された寓言も少なくないが、その性格は小説に近い。

ところで小説は小道であるとは考えられたけれども、中世においては魏の文帝は「列異伝をつくり、もって鬼物奇怪のことを序し」(隋書經籍志)、曹植は「俳優小説数千言を誦した」(魏志二、王粲伝注)と伝えられる。俳優小説とはおそらく俳優侏儒など宮廷生活の緊張を緩和する道化者の言説を中心とした宮廷文芸であつたろう。そうだとするならば、それは笑いの文芸という意味で広く笑話の発達とも関係しよう。これに対して「鬼物奇怪のことを序した」列異伝は、巫などを中心に構成された宗教的な世界を背景にもち、また方士などの神仙説に促されて発展した怪異についての記録である。前の俳優小説が人間の世界に寄せる関心であるのに対し、これは怪異の世界に寄せる関心であり、記録であるから、その特色をとらえて、これら一群の小説を「志怪」と呼ぶ。

志怪には搜神記、述異記、異苑など、その類に乏しくないが、列異伝の著者に疑問が持たれるのをはじめとして、著者あるいはテキストについては問題が少なくない。というのも小説は小道であり、古典のように尊重されなかったからであらうが、同一の説話が諸書に重複しているのを見ると、小説が筆写伝承された事情を想像することができる。その中にはがんらい民間の伝承に出たと思われるものも少なくない。このようにして六朝に開花した小説志怪は、やがて唐の伝奇成立の基礎をなすものであった。それでは唐の伝奇はどのようにして成立を見たものであらうか。

伝奇という語は人生の奇なるものを伝えるという意味であつて、もと裴鉞はいけいの著わした「伝奇」という書名に由来すると伝えられ、その著述は神仙を好む高駢へいにおもねったものであると解説をされる(郡齋讀書志卷三)。唐の小説の

中には神仙を語り、志怪の世界に通ずるものの少なくないのは、やはり前の時代の伝統を継承したからであろう。伝奇の初期の作品、王度の古鏡記は古鏡の奇蹟を綴って、取材も志怪的であるばかりか、叙述も編年の形式をとって、構成された小説といいがたいのは、それが過渡的な作品であるからであらう。けれども見逃すことのできないことは、叙述は素朴ながら次第に精緻な筆づかいを加えはじめたことで、補江総白猿伝一卷（唐書藝文志）などのように小説が独立の作品として単行されるようになったこととあわせ考えると、人人の小説に対する関心・評価の變化をうかがい知ることができよう。

ところで白猿伝には印度文学ラーマヤナの影響があると説かれるように、伝奇の成立には仏教文化の影響が大きな意味をもっていた。仏教の流伝は後漢の明帝のときと伝えられるが、以来仏教の奇蹟を物語る応驗記の類は宋の劉義慶の宣驗記、齊の王琰の冥祥記をはじめとして六朝志怪の中に少なくない。

晋の羊祜が幼いとき乳母に、以前遊んだことのある指環をさがさせた。云われたとおり隣の垣根をさがすと、出て来た指環は隣の死んだ子どものものであった（法苑珠林卷三五引く冥祥記）、というような転生を暗示する説話はすでに類型を成立させている。こうして小説の世界は、時間的にまた空間的にも非常な広がりを見せた。「生は長安に属し死は太山に属す」というように、早くも死後の世界が太山に想定され、やがて蔣濟説話（太平広記二七六引く列異伝また搜神記卷一六）のように生死をめぐる興味深い説話も成立するようになる。また仏教とともに印度の空想的な珍らしい説話もいろいろと伝えられて小説に影響を与え、豊かな色彩を添えるようになった。梁の呉均の続齊諧記、陽羨の書生のように、口から御馳走を吐き出したり妻を吐き出したりしてもなしたあげく、寝こんでしまおうと妻は口から別に愛人を吐き出して楽しむといった面白い話も譬喻経に出たものであり（段成式、酉陽雜俎続集貶誤）、また伝奇杜子春伝のようは

仙薬の鍊成を手伝う杜子春が妒ばたに無言の静坐をつづけて、猛獸、將軍、妖怪など、あらゆる威喝に堪えて

屈することがなかったが、最後に美女に生れ変り、夫が子どもを石の上に投げつけるのを見て思わず声をあげたので、妒は紫焰をあげて壊れた。

という、喜怒哀懼悪欲を忘れることはできても愛の一字だけは絶ちがたいという人生の姿を描いた作品も、実は大唐西域記に見える烈士池の印度の故事に取材したものであった（同上書）。

このように、がんらいは史伝に近い意識をもつて書かれた志怪が空想的なふくらみを示すためには、印度文化の大きな影響を受けたことを見逃すことはできないであろう。ただこのような比較については、これまで余り研究が進められていない。

内容に豊かさを加えた小説は、表現をこまやかにし、構成を整えることによってすぐれた作品を生み出すことになる。「たとい文章が古雅であっても意を用いることが繊刻にすぎれば、やはり小説に近くなる」（清・吳德旋、初月樓古文緒論）。精緻な觀察と委曲の表現をもつことによって、小説は次第に特色を示すようになる。唐の唐臨の冥報記のように、冥祥記などの流れを汲む素朴な応驗記にすら、そうした特色の見られることは注意される。しかしながら伝奇の成立に大きな力となったのは韓愈などの古文復興運動であると説かれる。それは韓愈の門弟沈亜之に異夢録・湘中怨などの作品があり、また復古派の元稹に會真記、白居易の弟白行簡に三夢記・李娃伝などの作品のあることから想像される。これと関連して当時の温卷の風習が小説の発達を促すものであったことが指摘される（魯迅、中国小説史略）。それは進士の受験に先だって、作者が自己の作品を文壇の重鎮に贈り、自己の存在を示そうとしたもので、作者の史才、詩筆、議論がそれぞれ示さるべきものであった（趙彦衛、雲麓漫鈔卷八）。そのような目標が与えられ、作品は構成をととのえ、表現をこまやかにしたのであることが想像され、その意味では温卷の風習は小説発展の一つの要因であったに違いないが、これもやがては形式主義への道を開くことと考えられよう。ところで張鷟の游仙窟は異色の作品であった。彼は輕薄な才子として人から卑しめられたが、作品は新羅日本な

どの使節が来朝するたびに購い帰った（新旧唐書張薦伝）、という話にも、その才能がうかがわれよう。小説は黄河の上流にむかう使者張生がはからずも積石山で游仙の窟ほらに一夜の宿を求めて崔十娘と五嫂との歓待を受けるといふ、ふしぎなめぐりあいから、夜明けのつれなさまでの叙述にすぎないが、描写は委曲で筆にたるみがない。とくに機智あふれる会話や詩歌の応酬に特色を示し、韻文の挿入は、あるいは仏教文学変文の影響があらうと説かれる。日本に伝えられて山上憶良の沈痾自哀文や大伴家持の歌（万葉集四）にも影響の見られるのは、愛読された事情を物語るものであらう。舶載は竹取物語の成立に先だつと推測されるが、作品はかえって中国に亡んで日本の写本によつて今日に伝えられた。この浪漫的色彩にあふれる作品は、唐の時代をどのように反映し、またいかなる点で王朝詩人の共感をかちえたのであらうか。いづれにしても、華やかな駢儷べんれいの文章は初唐の文壇の空氣を示すものにはかならない。

伝奇の作者が輩出するようになったのは開元天宝以後である。大暦年間の沈既濟しんきさいに枕中記がある。盧生が邯鄲道中で宿舎に憩い、道士呂翁から与えられた枕によつてうたた寝をする間に豪族清河の崔氏を娶り、官場に榮華を極めるが、醒めれば黄粱を炊ぐ間の夢であつた。これが人生であつたかという静かな諦念に結ばれる小説の背後には、仏・道の思潮が予想されよう。このような人生に寄せる感懷を叙した作品は、六朝志怪にはあまり見ることができないけれども、この夢で枕に入る着想は志怪（楊林・焦湖廟の説話、太平寰宇記二二六引く搜神記・幽明録）の中に得ている。作者は建中実録を著した史官で、なお史筆の体が見られるというのは、柳宗元の宋清伝などの作品が小説に近い意識をもたれたことと共に、やはり史伝と小説の深い關係を示唆するものであらう。

同じく夢をあつかつて知られているのは、元和年間の李公佐の手になる南柯太守伝である。淳于棼じゆんうふんが沈醉するうちに、紫衣の使者に迎えられて大槐安国たいかいあんこくに赴き、王女を娶り、南柯太守となつて治績をあげるが、醒めてみれば、つかの間の夢であつたという夢物語も、庭前の槐えんじやのものと蟻の穴を掘ると蟻のうごめく槐安国の首都が見出される

という、現実と夢の交錯に面白さがある。けれども、これも志怪に夏陽の盧汾が夢に蟻穴に入り審雨堂を見たという記録（搜神記卷一〇）のあるのを見ると、おそらくは着想を志怪に得たものであらうと推測され、その点伝奇成立の基盤としての六朝の志怪の意義を再吟味せざるを得ない。それにしても、なぜ夢の話がことさらに取りあげられるのであらうか。

白居易の弟白行簡に、夢物語を分析した三夢記があり、あちらの夢がやって来て、こちらでそれに遭遇ったもの、こちらで何かしたのを、あちらでそれを夢みたもの、あるいは両方たがいに通じて夢を見たもの、というように夢と現実の交錯が語られている。夢は古代の人人の意識にあつては實在の経験と混同せられたと説かれるが、中国の人人にとって夢は吉凶を占う対象として関心を深められた。夢が時間・空間をこえて、現実と呼応し、感応するという物語も、おそらくそうした古代の神秘主義の名残りであらうと考えられる。その意味では枕中記や南柯太守伝も神秘主義の世界から抜け出たものであらうが、実は伝奇にあつては、こうした夢が小説を構成するための手法であつたことも見逃すことはできない。かつて搜神記などの志怪が目録には史伝の部に列ねられたごとく、小説と史伝とはきわめて近い意識のもとにあつた。史伝に空想的なふくらみが与えられて、次第に小説が発達したとも考えられる。しかしながら、史伝は歴史の事実について語るものであつて、本質的には小説と異なる存在である。

小説が空想を交え、幻設の筆をはこぶためには、史伝の準則を脱離する必要があつた。そうした虚構の契機として、もっとも容易に取りあげることのできたのは、このような夢ではなかつたらうか。そうだとするならば、游仙窟がことさらに辺境の仙窟に舞台を取ったのも、中世の仙洞説話の発展として考えられるとともに、またそれは小説における虚構の契機として仙洞説話の手法がえらばれたものであるとも云えよう。

これは意識的に幻設の筆のすめられたことであり、志怪が伝聞を綴ることを主としたのとくらべて大きな相違である。

伝奇を志怪から分つ特色はいろいろ考えられようが、伝奇が別伝、劍俠、艶情、神怪などに分けられるように、取材の対象を広げたことも著しい事実である。ことに恋愛を描いて元稹の鶯鶯伝のように、若き日のほのかな愛情を綴った作品は、志怪の中に見出すことができない。墓場からぬけ出て来た女性を対象に描いた志怪が、なお鬼神の世界に対して強い関心を示しているものと云うならば、これは人間の世界に深い愛着を示したものと云えよう。白行簡の李娃伝が長安の名妓李娃に溺れて零落する青年の姿と、これを助けて更生させる妓女の義俠を描き、蔣防の霍小玉伝が詩人李益と妓女霍小玉との間にめばえた恋愛を取りあげ、男の変心による悲恋の哀恨を叙したのも、みな妓女をめぐる恋愛を主題としたものであったが、このように恋愛が自由に物語られたことは、時代の空気を示しているものであろうし、また伝奇の性格を現わしているものでもあろう。こうした恋愛の物語はそれぞれ戯曲に脚色されて後世の文芸に大きな影響を残した。その意味では中国の恋愛物語の類型を示すものとして注意されよう。

劍俠は楊巨源の作と伝えられる紅線伝などに代表される。節度使薛嵩の侍女紅線が主人の憂愁を察し、神術をもつて田承嗣の陣營に忍びこみ、枕もとの金の小箱を奪つて帰ったのに驚いて、田承嗣は自己の専横を詫びるという物語は安禄山・史思明の乱以後の混乱した政治情勢を反映するもので、轟隱娘伝とともに女俠の神術を主題としている。薛調の劉無双伝も秘術を能くする俠士の活躍が描かれているが、総じて劍俠は活殺自在の神通力をもつ超人的な性格に描かれ、その点になお志怪的な姿が見出されるとともに、やがては西遊記、平妖伝などの神魔小説の世界に連なるものを持っていると考えられる。

李朝威の柳毅伝は竜女をめぐる水神説話を主題としているという意味で神怪に分類される。

柳毅が路傍の羊飼いの婦人から手紙を頼まれ、洞庭湖の竜宮を訪れると、竜王は娘の不幸を知って怒り、錢塘君は竜女を虐待した夫を食い殺して復讐をとげる。柳毅は竜宮で歓待を受け、宝物をもらって帰り、幸福な生

活を営む。のちに妻を失って後妻を迎えたが、それはかつての美しい竜女であった。

という説話は明らかに河伯などの水神説話の系統をひくもので、洞庭の橘樹を三たび叩くと波間から迎えのものが現われるというのは、志怪に多く見られる異郷訪問の形式である。また竜宮訪問談の典型として知られる如願の話——ある商人が彭沢湖を通るたびに供えものを投げたので水神に招かれ贈物をたまわった。商人は使者から教えられた通り如願をいただいて帰ったが、如願とは水神の侍女で、欲しいものは何でも取り出してくれたから、彼は大金持になった（搜神記巻四）——は現在にいたるまで広く行われた民話であり、数多くの財宝や美しい女性の獲得は、そのまま民衆の富や結婚に対する渴望を物語るものである。柳毅伝では説話は波瀾に富み、竜女の描写にも人間的な愛情が深められ、すぐれた小説として構成されているが、成立の背後には中世志怪に見られる民話の影響を考えないわけにはゆかない。このように伝奇の成立については志怪の伝統が重要な意味をもっているとともに、また志怪のなかにはかなりの民話の反映が考えられることが特に注意さるべきである。

小説が政治との関連において問題になったのは牛僧孺の作とされる周秦行紀である。作品は都よりの帰途、豪家に泊り、漢の文帝の母薄太后をはじめ王昭君・楊貴妃などに逢い、詩の応酬をしたが、一夜あければ、荒れはてた薄後の廟であったという物語で、中に徳宗を沈婆児と称するような不遜の語があると非難された。けれどもこれは実は政敵が彼を陥れるために作ったものであると云われ（郡齋読書記、後志二）、牛僧孺・李德裕の対立した当時の政治状況を反映するものであると解される。牛僧孺には小説集玄怪録十巻の作があったと伝えられ、「宰相の位にありながら、このような著述のあるのは、まことに周秦行紀の非難をまねいたのも、もつともなことである」（前掲書）と評された。いずれにしても伝奇がこのように政治と関連して論じられたということは、伝奇がやはり知識人の世界のものであったことを物語るものであらう。